

ダニエル書4章32節 「痛い目にあう幸い」

1A 人生にある道

1B 聖書の指し示す道

2B 平安と災い

2A 破滅に先立つ高慢

1B 天からの良き賜物

2B ネブカデネザルの教訓

3A 神の警告

1B 良心

2B 敬虔な人

3B 時という試験

4A 愛する者を懲らしめる方

1B 災いから遠ざかる人

2B 激しく泣いた弟子

3B 真正の息子

本文

ダニエル書 4 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは先週でダニエル書 3 章まで来ました。午後に 4 章を一節ずつ読んでいきます。今朝は、4 章 32 節に注目します。「**あなたは人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べ、こうして七つの時があなたの上を過ぎ、ついに、あなたは、いと高き方が人間の国を支配し、その国をみこころにかなう者にお与えになることを知るようになる。**」

これは、ネブカデネザルがバビロンを治めて、後期のことです。バビロンが全盛を極めて、自分の宮殿で栄えていた時に、夢を見ました。その夢が恐ろしくて、ダニエルに解き明かしてもらいました。それは、今読んだように、自分自身が獣のように理性を失ってしまい、鎖につながれて七つの時、おそらく七年間を過ごし、それから理性が戻りますが、その時に自分の権力や能力によって、この国が立っているのではなく、いと高き方が支配して、この方が権威と力を与えておられることを知るようになる、というものです。彼は、辛い方法で、痛い目にあって、神の正しい道を知りました。

1A 人生にある道

1B 聖書の指し示す道

人生には、道があることを聖書は教えています。「詩篇 1:6 まことに、主は、正しい者の道を知っ

ておられる。しかし、悪者の道は滅びうせる。」とあります。ちょうど、重力の法則があり、その法則に逆らっていきようとしたところで、上から落ちるものを引き上げることができないのと同じように、自分の計画によってその道から免れることができると思っても、またその道に引き戻されます。そして、正しい者の道を歩んでいるものは、いかに災いの中に見えるように見えても、やはり幸いを終わりには得ていることに気づきます。私たちの計画や思いによって、その道が変えられるわけではありません。箴言 16 章 9 節には、「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。」とあります。

そして、イエス様が弟子たちに言われました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。(ヨハネ 14:6)」キリスト者は、人がいろいろ道だと言っているものの中で、イエスという方こそが道そのものであり、真理であり、命であると決め、この方に付いていっている者たちです。

2B 平安と災い

私たちは、どの道を歩むかによって、その人が平安でいられるか、災いの中にいるかが決まります。箴言には数多く、知恵のある道には平安があり、悪者には災いがあることを対比させて教えています。「4:11-19 私は知恵の道をあなたに教え、正しい道筋にあなたを導いた。あなたが歩むとき、その歩みは妨げられず、走るときにも、つまづくことはない。訓戒を堅く握って、手放すな。それを見守れ。それはあなたのいのちだから。悪者どもの道にはいるな。悪人たちの道を歩むな。それを無視せよ。そこを通るな。それを避けて通れ。彼らは悪を行なわなければ、眠ることができず、人をつまづかせなければ、眠りが得られない。彼らは不義のパンを食べ、暴虐の酒を飲むからだ。義人の道は、あけぼのの光のようだ。いよいよ輝きを増して真昼となる。悪者の道は暗やみのようだ。彼らは何につまづくかを知らない。」

そこで私たちは、その道、また戒めをそのまま聞いて平安の実を結ばせるのか、そうではなく、痛い思いをしてその道を知ることができるのか、どちらかです。ネブカデネザルは、主の道を、獣のようになって七年間を過ごすという痛い思いをして、知ることができました。いずれ、その道を知ることになるのですが、そのまま平安を得るか、それとも懲らしめを受けて初めて平安への道を知るかどちらかです。

2A 破滅に先立つ高慢

ネブカデネザルが陥った道は、「高慢」でありました。聖書には、神の忌み嫌われる罪が七つあるとありますが、その第一が、「高ぶる目(6:17)」です。悪魔が陥った罪は、「いと高き方のようになりたい」というもので、それで墮落したし、同じ誘惑で、「あなたは神のように賢くなれる」とエバをだましました。自分でやっていける、自分が自分の道を知っている、自分のことは自分で済ます。人は自分独りでも生きていけないし、他の人間との間だけでも生きていけません。自分の息を今、保たせている、天地を造り、命を与えておられる神によって生きています。それを認めないで生き

るのは、悪魔から来た者であり、高ぶりです。そしてその高ぶりの後には何があるかという、「破滅がある」と聖書は言っています。「箴言 16:18 高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。」

1B 天からの良き賜物

パウロは、コリントにある教会の人々に、「あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。(1コリント 4:7)」と言いました。そうですね、全ての良き賜物は、天から来ています。「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。(ヤコブ 1:17)」すべてのことについて、私たちは神からの恵みだと知って、それに感謝して、神をほめたたえることができます。私たちは、自分に与えられていることについて、卑下する必要はありません。また、誇り高ぶってはいけません。どちらも、自分に何か良いものがあるかどうかという前提に立っています。そうではなく、すべて良き賜物は神から来ているのです。しばしば、スポーツ競技において、アメリカン・フットボールや、ブラジルのサッカーなどにおいて、点を入れるとひざまずいて祈る場面がありますね。全ては神から来ていることを示しているのです。それが、あたかも神からもらっていないものであるかのように誇る時に、高慢の罪を犯します。

2B ネブカデネザルの教訓

ネブカデネザルは、とてつもない能力が与えられていました。そのたぐいなき才覚によって、国々を征服し、それを自分の支配下に置き、国をまとめました。そして後年は、バビロンの都をあらゆる美しい建造物で満たしました。空中庭園が、その有名なものの一つです。それが、彼自身の能力ではなく、神から来たものであることを教えていたのが、ダニエルです。彼は、ネブカデネザル王の見た、人の像についての夢を解き明かし、「天の神はあなたに国と権威と力と光栄とを賜い、また人の子ら、野の獣、空の鳥がどこに住んでいても、これをことごとく治めるようにあなたの手に与えられました。(2:38)」と言いました。

しかし、ネブカデネザルはこの時の夢に従順ではありませんでした。その夢では、人の像においてバビロンは金の頭だけです。バビロンは後に銀の胸と両腕であるペルシャ、そして青銅の腹と太ももであるギリシャ、そして鉄のすねであるローマにとって変えられるはずであります。それからローマの後に粘土と鉄の混じったようになって、その時に人手によらず切り出された石によって、粉々に砕かれて、それでその石が大きな山となります。キリストによる国、神の国が地上に立てられるということです。ところが彼は、全身が金の像を造り、それを自分の支配している者たちにひれ伏させました。自分の力と栄華は永遠に立つと思っていたのです。それに対して、静かに抵抗したのがダニエルの友人三人です。彼らを火の燃える炉に投げ入れたのに、それでも害を受けなかったのを見て、ネブカデネザルは彼らの神をほめたたえました。

ところが彼の治世の後期に、このように夢を見ました。そしてダニエルが解き明かしました。ところが、彼は自分の権勢、自分の力、自分の栄華を誇りました。神に栄光を帰さなかったのです。

3A 神の警告

1B 良心

神は、私たち人間にこうした高慢という罪を犯すことがないように、その道に歩むことがないように、注意喚起や警告の信号を送ってくださいます。まず、その信号とは「自分の心の奥にある良心」であります。「そこに入るのは、危険である。そこから離れなさい。あなたを滅ぼす。」という信号を、私たちの良心を通して、神は教えてくださいます。ローマ人への手紙 1 章から 3 章には、それぞれ、いろいろな人に、神が信号を送っておられることが書かれています。たとえ、聖書を読んだことがなく、神やキリストについての知識がなくとも、やはり与えられている知識があります。「知っています」という言葉が繰り返されています。「ローマ 1:29-32 彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしめる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。」これらのことを行なっている時に、それは悪いことであって、死罪にあたるということを知っているのです。

続けてパウロは、自分がそれほど悪いことをしているわけではないと思っている人についても話しています。「ローマ 2:14-16・・律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。・・私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。」自分の中に、「これはしてはいけない」と教える律法が、良心の中に与えられているというのです。そして、福音は、その心の思い計りにしたがって神が裁かれることを教えています。つまり、この世では裁判所で刑に定められていなくとも、隠れて行なっていたこと、自分が「これはいけない」と言いながらそれを行なって自分を罪に定めているようなことも含めて、神は裁かれるのです。

そして続けて使徒パウロは、すでに聖書を教えられている者たち、いや教えている教師たちに対しても語っています。「なすべきことがなんであるかを律法に教えられてわきまえ」とあり、「どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。(ローマ 2:18,21)」と言っています。自分は聖書を知っているということだけで、自分は救われません。教えられていることをわきまえているのに、自分はそのことを誇って安住していて、「けれども、自分自身には教えていない」と自分でも気

づいている、ということです。

2B 敬虔な人

こうやって私たちの心の良心というものが、警告を与えてくれます。それだけでなく、敬虔な人が私たちのそばにいて戒めを与えてくれることもあります。ネブカデネザルには、ダニエルがいました。彼は決してネブカデネザルを糾弾しなかったし、むしろ彼こそが王を敬い、彼に益になることを真剣に思ってくれている人でした。その彼が、神の真理について、夢の中に現れたものをそのまま話したのです。それでネブカデネザルは、ダニエルに「**聖なる神の霊があなたにある(4:18)**」と言いました。そしてダニエルは王に対して、解き明かしをした後に、「**4:27 王さま、私の勧告を快く受け入れて、正しい行ないによってあなたの罪を除き、貧しい者をあわれんであなたの咎を除いてください。そうすれば、あなたの繁栄は長く続くでしょう。**」とまで話したのです。他に、自分にこびへつらう知者たちが沢山いる中で、彼は自分のことについての真実を語ってくれると信頼していたのです。ダニエルの友人三人もまた、王の命令に逆らってまで、イスラエルの神が神々の神であること、まことの神であることを、身を決して示してくれたのです。こういった、自分を愛し、主を愛する友がいることは、かけがえのない財産です。

3B 時という試験

しかし、ネブカデネザルは忘れてしまいました。ダニエルに、夢の解き明かしをしてもらい、助言までもらったのですが、その一年後、彼は宮殿の屋上を歩いていた時に、「**4:30 この大バビロンは、私の権力によって、王の家とするために、また、私の威光を輝かすために、私が建てたものではないか。**」と言ってしまいました。それで彼は獣のように理性が奪われるという、彼にとってもっとも大切な部分を奪われてしまったのです。時というのは、試験であります。警告を聞いた時は、ふむふむと聞いています。そして、自分は大丈夫だと思っています。けれども、心がそこから離れて行ってしまうのです。

同じようなことが、エレミヤ書にもあります。バビロン捕囚の後に、僅かに残っていたユダヤ人たちは、王を恐れてエジプトに逃れようとしていました。それで彼らは、それが御心にならないうかどうか、エレミヤに尋ねました。彼は祈りました。「**十日の後、主のことばがエレミヤにあった。(42:7)**」とあります。十日のうちに、彼らは主を御心を求めるのではなく、むしろ初めに願っていたこと、つまりエジプトに下ることが先決であるという自分たちの願いや思い、考えを優先させていったのです。エルサレムに留まりなさい、王は何もしない。しかしエジプトに下るならば、そこにネブカデネザルが下って来て、そこを攻めるようになる」と預言したのです。ところが、彼らは聞く耳を持っていませんでした。エレミヤの預言の書記であったバラクが、エレミヤをだましたのだと言いがかりをつけました。十日という期間が、彼らを試したのです。

そしてイエス様は弟子たちに、終わりの日というのはそのようなものであると警告したのです。主

人に任されて食事を、しもべたちに与えるように任された者たちとして例えました。「マタイ 24:49-50 その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。」ということです。まだまだ帰るまいという心が、まだ主人が戻って来ない時に出て来たということでもあります。私たちが何を思っているか、それが時というものによって明らかにされます。

4A 愛する者を懲らしめる方

1B 災いから遠ざかる人

このようにして、私たちは高慢の罪から遠ざかることが必要です。その道を歩まないように、戒めを受けて遠ざかれば、その先には平安があります。ダビデがそうでした。サウルが自分の命を奪うべき、追いまわしていたのに関わらず、彼は決してサウルに手を出そうともしませんでした。アビガイルという聡明な女がいましたが、ナバルという夫がダビデを侮辱しました。それを知った彼女は、ナバルをこてんぱんにしようとして歩いてきたダビデの一行のところに急いでいき、頭を地面につけて、ひれ伏して自分の用意した糧食を受け取るように懇願しました。そしてこう言いました。「1サムエル 25:30-31 主が、あなたについて約束されたすべての良いことを、ご主人さまに成し遂げ、あなたをイスラエルの君主に任じられたとき、むだに血を流したり、ご主人さま自身で復讐されたりしたことが、あなたのつまずきとなり、ご主人さまの心の妨げとなりませんように。主がご主人さまをしあわせにされたなら、このはしためを思い出してください。」ダビデは、アビガイルの知恵ある行動をほめたたえました。決してその警告をないがしろにしなかったのです。それで彼は流血の罪を免れたのです。

2B 激しく泣いた弟子

しかし、主からの警告を受け入れずに痛い思いをして、教訓を学んだ弟子もいます。ペテロです。彼は、自分が死んでも、他の弟子たちがイエス様を否んでも自分はそうしないと強く言いましたが、ご自身を三度知らないという警告しました。案の定、彼は否みました。それで、激しく泣いたとあります。ペテロは、痛みをともなって主の教えと道を知ったのです。

3B 真正の息子

このようにして、主は懲らしめられます。しかしそれは、愛されている証拠です。イエス様は、「わたしは、愛する者を懲らしめる。」と言われました。そしてヘブル書があります。「ヘブル 12:5-8 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。」愛されているからこそ、痛みを受けます。そして主の道を知らせます。